

ヴェーユ身体論〔補 V〕

—— デイドロやカントとの比較 ——

村 上 吉 男

前号⁽¹⁾の最後に掲げた引用文を含め、それらに語られたすべてが〈感受性 (sensibilité)〉のことをさすとみるにせよ、デイドロはこれをいかに捉えんとしていたかを筆者なりにまとめおくとすれば、およそ以下に記すようになろう。諸引用文を見渡してまずいえるは、彼が無神論的唯物論的な思想家とみなされるからか、〈物質〉をば当然、人間を含めた〈動物 (生物)〉の〈諸器官 (部分)〉自体に当てはめるだけか、〈諸器官 (部分)〉の、つまり〈物質〉のそれぞれのなかをいわば駆け巡る、要は流れ伝わる〈運動〉の、デカルトも述べた〈動物精気 (esprits animaux)〉⁽²⁾や、筆者にいう「神経伝達物質」に充当させたかにみえることにある。するとデイドロはデカルトに倣って、〈物質たる感受性〉がこの〈動物精気〉や「神経伝達物質」の両方あるいはいずれかとして「流れ伝わる」とみていたかである。デイドロの場合、かかる〈感受性〉は「神経伝達物質」として「伝わる」のだ。なぜならデイドロに〈物質〉が、すなわち〈神経だけがそれ自身で感受性を有している〉と語らせるとき、〈物質 (器官)〉である〈神経〉(のなか)を「伝わる」のは〈感受性〉以外ではなくなるし、彼にとって〈感受性〉は「神経伝達物質」にほかならなくなるからである⁽³⁾。と同時に、この〈(神経伝達)物質〉なる〈感受性〉は「伝わる」と書き得たところから、〈持続的〉〈運動〉でしかないと、こうした〈感受性〉の〈運動〉は〈その必然的帰結〉をもたらすといわれるかぎり、筆者にいう「生得的」であり、ヴェーユにいう〈必然性〉の一であるとみてかまわなくなる (なお「神経伝達物質」にかかわる、筆者の彼女への結語は後記に譲る)。

次に、〈動物的構造〉の一たる、〈持続的〉〈運動〉の〈感受性〉がデイドロにあって、いかなる〈様相〉をみせているかといえは、それは一に、〈感受性〉が

身体の〈感覚(sens)〉に、ならびに〈魂(l'âme)〉の〈感覚(sensation)〉になろうことを、一に、それぞれの〈感受性〉をして〈被刺激性(受容性)〉を意味させ、各〈器官(身体や魂)〉に受け入れさすことをあらわすにある。〈被刺激性(受容性)〉すなわち〈感受性(sensibilité)〉とは、身体や〈魂〉が各受ける、〈この世界(外部)〉や人間(身体)内部からの刺激にかかわる謂でしかないし、この各刺激はデイドロに〈敏感な、活発な〉と記されるごとき、その〈変化(度合い)〉を示すにちがいない。だが〈感受性〉は何ゆえ〈諸器官〉に「受け入れ」られるといい得るのか。これには彼が〈器官は感受性に対する、自らの分け前を有し、感受性を保持する〉⁽⁴⁾と断じたからである。一方身体や〈魂〉の各〈感覚〉のうち、〈sens〉をもってなぜ身体(の〈感覚〉)といわせ得たのか。彼は〈感受性あるいは触覚はあらゆる生物(動物)に共通な感覚(sens)になる〉と記していた。だから〈感受性〉はむしろのこと、〈触覚〉なる語より、〈触覚〉は身体に生じる〈感覚〉以外ではないがために、身体の〈感覚〉といわれるわけである。上記引用文中の、〈感受性〉と等位的に並べられた感のある〈触覚〉には、〈感受性〉の身体〈器官〉への〈受容〉で、〈感受性〉が〈感覚〉すなわちここにいう〈触覚〉になるとの読みさえ可能にしようし、〈触覚〉が〈(神経伝達)物質〉でしかないは、〈物質たる感受性〉が〈感覚〉になるとされるからして、〈感覚〉も〈(神経伝達)物質〉であることで証明されるほかなくなるわけである。要は身体のみばかりか、〈魂〉の各〈感覚〉にとって、〈被刺激性(受容性)〉すなわち〈感受性〉なしに、〈感覚(物質)〉が生じてこない関係にあるということである。しかしながら〈感覚〉が身体や〈魂〉の各〈器官〉に、それぞれ〈sens〉やデカルトのいう〈sentiment〉の語とは相違させた〈sensation〉として配置されたことは、デイドロに確かめられども、両〈感覚〉が各〈器官〉ごとに生まれるにすぎないのか、それだけでなく、たとえば〈感受性〉がある身体〈器官〉で〈感覚(sens)〉になり、その身体から〈魂〉へと伝達され、この〈感覚〉をして〈魂〉の〈感覚(sensation)〉たらしめる関係、つまりヴェーユにいう、ここでは〈sens〉と〈sensation〉にかぎらせる〈身体と魂との関係〉もあるといえるかを筆者に問いかけずにはいない。〈感受性(感覚)〉を、要はもっぱら人間(身体)内部の〈物質〉を強調する、唯物論者たる

彼にあって、〈魂（脳）〉すら身体〈諸器官〉の一に見据えていたのだから、または〈諸器官（物質）〉間の各〈動物的構造〉での〈持続的〉〈運動〉に従わざるを得なくなるのだから、この身体の〈感受性（感覚）〉が〈魂（脳）〉に影響（関係）して〈魂（脳）〉の〈sensation〉を生み出すと推測できるが、それでも筆者の浅い読みのせいで、かかる〈身体と魂との関係〉がデイドロに窺えるとの確証は得られなかった（以下ではしかし、この〈関係〉が彼にもみられることを前提に語ることにする）。

そして、〈動物的（神経伝達）物質〉とされるからして、当然〈運動〉せずにいないのが〈感受性〉の〈特性〉であるとともに、〈感受性〉が身体〈諸器官〉や〈魂〉たる〈器官〉という諸〈物質〉で〈感覚（sens や sensation）〉を生じさせる〈被刺激性〉となって〈受容〉されるばかりか、さらに〈生命〉なる〈特性〉を持つと語られる。そこでデイドロにとって、〈生命〉は何かである。「何か」をみるうえで、筆者は〈感じる（感受性すなわち感覚）は生き（てい）ること（生命）である（Sentir c'est vivre）〉と括弧を付した訳文を取り上げる必要がある。別言するとデイドロのこの文章に賛同する人間たちは〈感じること〉によって、〈感受性すなわち感覚〉を自らのもの（物質）にできるし、これをして彼（人間たち）の〈生命〉たらしめられては、〈生き（てい）ること〉を証ししなければならないということである。ここから筆者は、前段最後に記しおいた〈身体と魂との関係〉が彼にみられることを肯定しないわけにゆかなくなる。前号諸引用文の一に初出し、上記訳文中の語〈sentir（感じる）〉は、そこに述べられる通り、彼にあってさえ身体〈諸器官〉（の能力）に対してではなく、不断「精神」といわせるに等しい〈魂（l'âme）〉とともに使用される。だが〈魂〉の〈sentir〉がデカルトと同様に、〈運動〉を示唆させる〈能動〉能力であると察知され得るならば、〈sentir〉は〈魂〉で身体内部から伝わる〈感受性すなわち感覚〉を〈感じる〉役割を受け持たされることになる。〈sentir〉には一般的にいて、〈魂〉に用いられる、この用法以外にないのだから、したがって〈sentir〉はデカルトやヴェーユに〈ressentir〉と各書かれるごとく、身体の〈能動〉能力をさすこととは違うのだから、〈ressentir〉の語をデイドロに見出せない非は筆者に帰すれども、少なからず〈sentir〉が〈この世界〉たる外部の何ら

かの対象への作用を契機にして、身体〈諸器官〉の一に〈感受性（感覚）〉をもたらすためにあるのでなしに、前記したように、身体内部ですでに生じていた〈感受性（感覚）〉に働きかけて、改めてこの〈受動〉能力としての〈感受性（すなわち感覚）〉を〈魂〉に〈受容〉せしめると受け止めるほかなくなってしまうのである。すると〈sentir〉は、〈sentir〉が〈魂〉の〈感覚（sensation）〉をかたちづくることを意味すると同時に、身体と〈魂〉とをかかわらせずに作用しはしないことをも明らかにさせてくる。〈感じる（sentir）こと〉の対象は身体内部の〈感受性（すなわち感覚）〉であり、かつこの〈感じること〉が〈生き（てい）ること〉だという〈生き（てい）る〉は、今まさに現在のことを、要は〈感受性（すなわち感覚）〉たる〈（神経伝達）物質〉を現実〈運動〉させている、とどのつまり身体と〈魂〉とを〈理性（知性）〉ではない〈物質〉で今動かしめることをあらわす以外になく、それをして〈生命〉であるといわせることにある。〈生命〉は繰返すが、たとえばデカルトの〈コギト（je pense）〉による「観念論」で、〈生き（てい）る〉すなわち〈スム（je suis）〉なる〈生命〉が実感たらしめられるのではなく、人間の身体内部の〈物質〉をさして語られる「唯物論」にあって問われることを示唆させる。デイドロは、〈物質たる感受性はその諸器官に固有の生命になる〉ばかりか、〈物質（の特性）〉は〈運動、生命、感受性〉だと、さらにこの〈生命〉である〈感受性〉は〈被刺激性（受容性）の力〉としてあるし、〈動物的物質の運動以外の、その必然的帰結以外の何ものでもない〉と記しておいていたではないか。その通りなのだ。これらを見逃しにして、デイドロにいう「唯物論」は語られない。しかも身体内部の〈物質たる感受性〉が〈感覚（sens）〉に捉えられ、この〈感受性（感覚）〉で現実を〈生き〉られるとしたことは、彼を「唯物論」者に仕立てたゆえんになるか分からぬが、彼自身は〈魂〉の〈能動〉能力と見立て取り上げるであろう〈sentir（感じる）〉だけでもって、身体の〈運動〉や〈生命〉である〈感受性（感覚）〉をば〈魂〉に繋がらせることを証し得たのであり、〈sentir〉の働きによってのみ、筆者は彼に身体の〈能動〉能力を見出せずとも、〈身体と魂との関係〉を明らかに問えた「唯物論」者であると読むことができるわけである。だが同時に筆者には、彼の「唯物論」が身体内部の〈物質〉を質すだけだと察知されるか

らして、かのマルクスのような、〈この世界〉たる外部を〈物質〉に見て取り、こうして〈物質〉を〈感覚〉で捉え得たのみか、史的に発展させた「唯物論」には収まらないほか、その身体内部の〈物質たる感受性（感覚）〉で含意される〈運動〉や〈生命〉もヴェーユの語るところと異なり、筆者にいう「生得的」な〈運動〉や〈生命〉をあらわす謂にとどまるごとくに、現実にはさせるしかなかったと受け取られるのだ。

そこで、ヴェーユにいう〈感受性〉を明らかにせずにおれない筆者は、前段までに触れおいたディドロのいう〈感受性〉との比較により、彼女にあって、彼とのその異同がどこに見出されるといえるかをまとめおかねばならなくなる。それは一に、彼にいう〈物質〉が〈動物（生物）〉の〈諸器官〉をさすといわれる際、彼女においても、身体や〈魂（脳）〉を含めた〈諸器官〉がみな〈物質〉とされるは当然だし、そのうえ「神経」を伝わる〈感受性〉さえ〈（神経伝達）物質〉であり、「生得的」な〈運動〉をすると筆者に語らせる以上、このかぎりでの〈生き（てい）る〉〈生命〉になるは同じにみえるにせよ、彼女にいう〈感受性（物質）〉が〈感覚になる〉ことはないともておくことにある（ここでは〈感受性〉のままにあるというだけにする）。〈感受性（物質）〉が〈感覚（物質）になる〉にあって、ディドロ（1713年－1784年）と同時代の一人である、〈感受性〉や〈感覚〉とも強調せず、また〈感受性は感覚になる〉とも断じず、それでいて人間の精神を脳なる内部〈物質〉の機械的作用に見立てた、前記の「唯物論」者ラ・メトリ（1709年－1751年）は論外とみなすにしても、もう一人の「観念論」者カント（1724年－1804年）は筆者にすれば、ディドロのいう〈感受性（すなわち感覚）〉のことを参照にしていたか、それとも〈感覚〉を〈信用しない〉といって否定したデカルトと、〈感覚〉に依拠するゆえに〈感覚〉を肯定せずにはない、イギリス経験論の哲学者たちとの影響を受けて、両者の思想を折衷したのか定かでないにもかかわらず、〈Sinnlichkeit〉を〈意識（表象）〉として打ち出し、この一般的な訳語〈感性〉をたとえば〈感性に属する感覚〉たる〈Sinnliche Empfindung（感性的感覚）〉⁽⁵⁾に等しくなるとみたのだから、カントにいう〈感性（sinnlichkeit）〉は〈感覚〉の語を前面に出さずとも、〈感覚〉を〈感受性〉にかかわらせたディドロと子細を除いてほぼ同じく、〈感覚〉を

〈感性〉の語に作り換えたといえるように推察されるのだが、しかしヴェーユにはこうした折衷やデイドロの〈感受性は感覚になる〉との指摘に当てはまることがないと繰り返しておく。

また一に、デイドロにいう〈物質〉が人間内部に生じくるは、マルクスやカントを各例にして触れおいたように、いやこの二人にかぎらず、通常〈感覚〉が〈この世界（外部）〉の対象（カント以外は〈物質〉）を捉え得ることになるうが、デイドロばかりかヴェーユにとって、こうした〈感覚〉の〈運動〉にみられるのではなく、〈感受性〉のそれに起因したことにあった。なぜなら〈この世界（人間を除いた外部）〉に対し〈運動〉する〈物質〉さえデイドロやヴェーユにおいて、何はさておき人間内部の〈感受性（神経伝達物質）〉でなければならなかったし、彼らはデイドロにいわせる〈特性〉の一である、この〈感受性（神経伝達物質）〉を身体や〈魂〉での、これも彼に〈特性〉とされる、そのさらなる一である〈被刺激性（受容性）〉として受け取るしかなかったといえるからである。こうして「外部」へも対応し得る、彼らにいう〈感受性〉が人間内部（身体や〈魂〉内部）で〈被刺激性（受容性）〉になった途端、なかでもデイドロにのみ〈感受性は感覚になる〉と断じられたがゆえに、筆者には彼とヴェーユとの〈感受性〉の違いがみえてくると指摘できたわけである。彼が〈感受性は感覚になる〉と記したのは、身体や〈魂〉における、各〈感受性〉すなわち〈被刺激性（受容性）（の力）〉なくして、身体の〈感覚（sens）〉や〈魂〉の〈感覚（sensation）〉を各〈器官〉にもたらし得なくなるからである。要は〈感覚〉を生じさせるは〈感受性〉すなわち〈被刺激性（受容性）〉の〈力〉によるほかないのだ。かかる〈力〉が何かは後述するとして、ここでは彼が〈（神経伝達物質）たる〈感受性は感覚になる〉、「知る作用（認識）」を提起した「唯物論」者であると、この「知る作用（認識）」を述べ語る「認識論」はデイドロ独自のそれであったと付け加えおく。もっぱら人間内部の〈物質〉に出発する、彼の「認識論（唯物論）」を、〈この世界（外部）〉の〈物質〉を重んじ、これを〈感覚〉に託して組み立てられる、マルクスの「認識論（唯物論）」と比べれば、独自さはなおさらであろう（ちなみに、対象（外部）を映し取る〈感覚（Empfindung）〉が意識での〈受容性（Rezeptivität）〉によって〈感性（Sinnlichkeit）〉

を〈表象〉させると語るカントの「知る作用（認識論（観念論）」）もディドロの「認識論（唯物論）」に比べては独自であった（この「観念論」が〈感性〉よりも、悟性を基軸に成るは周知のことであろう）と、またディドロという身体の〈感覚（sens）〉や〈魂〉の〈感覚（sensation）〉はそれぞれ、筆者のいう、デカルトの「日常的用法」でとくに使われた〈sens〉や〈sentiment（passion）〉の参照ではなかったかと記しておく。

前段でのディドロにいう〈感受性（sensibilité）〉に関し繰返してでも確認されるべきことは、ヴェーユにいう〈感受性（sensibilité）〉が〈感覚になる〉ことはない、つまり〈この世界（外部）〉に働きかける、彼女のいう〈感じる（ressentir）〉から、その〈感受性〉を生じさせる〈運動〉は、彼のいう〈感じる（sentir）〉とその〈感受性〉なる〈運動〉と同じにみえるにせよ、彼女の場合、「外部」とかかわった〈感受性〉の〈運動〉が今度は人間（身体や〈魂〉）内部での〈被刺激性（受容性）〉（彼女にとっては〈受容〉ないしは筆者にいう「閾値」に相当する）以降、〈感覚になる〉〈運動〉に代えられるのではなく、〈感受性〉のままに身体より〈魂〉にまで〈運動（伝達）〉し続けるということにある。〈感覚〉の方は彼女にあって、すでに一見した通り、〈感受性〉とは別個にみなされるが、これと同様に「外部」に作用してもたらされる、身体や〈魂〉の各能力となった。〈感覚〉が生じる際、彼女は身体では〈能動〉能力〈ressentir〉とその〈受動〉能力〈sensation〉の各語を、〈魂〉では〈能動〉能力〈sentir〉とその〈受動〉能力〈sensation〉の各語を用いつつ、たとえば身体の〈感覚（sensation）〉が〈魂〉に伝えられたうえで、〈魂〉の〈感覚（sensation）〉を現出させたり、あるいは〈魂〉の〈感覚〉にさらに〈魂〉の〈能動〉能力〈再び感じる（ressentir）〉が作用しては不断にいう〈感情〉を生み出したりすることを述べていたと付記しておく。

しからはヴェーユにいう〈感受性〉が身体や〈魂〉内部に亘って〈運動（伝達）〉し続けると筆者に断じられたは何ゆえか。それは筆者にとって、〈感受性〉の〈運動は量である〉という、彼女の言を再度主張すること以外にない。すると筆者がディドロの引用文に語られた、〈物質〉たる〈感受性〉の〈運動〉を、彼に〈敏感な、活発な〉と表現されては、かの〈被刺激性（受容性）〉さえ、か

かる「度合い」を示さずにいないと前記していたことから、この〈被刺激性（受容性）〉は三者（ヴェーユ、デイドロやカント）にあって、〈量〉や「度合い」のいずれに捉えられるかが明確にされておかねばならなくなる。これこそ筆者がすでに、「〈感覚〉を生じさせるは〈感受性〉すなわち〈被刺激性（受容性）〉の〈力〉による」とみて、「かかる〈力〉が何か」と記す、この問いに充当してくるのだ。だからここで、たとえばデイドロの言を借りていえば、〈被刺激性（受容性）の力〉とは当のデイドロやカントでも、ヴェーユでも、〈量〉や「度合い」で捉えて済むのかどうかを検証する必要があるというわけである。

これを確かめるべく、筆者が〈力〉の一方とみなしおいた、〈運動は量である〉ことに立って、その〈量〉を中心に語るならば、まずそう言及したヴェーユが取り上げられるは当然のことになる。むしろこの結語は、彼女にいう〈感受性〉の〈運動〉がデイドロにいう〈被刺激性（受容性）〉にあって〈量〉であり、「度合い」とみられることはないということにある。しかもその〈運動〉は「生得的」な〈運動〉にとどまらず、あたかも「〈量〉の量」をあらわさずにいない〈激しさと時間〉を伴わせる〈量（運動）〉であった。こうしてかかる〈量（運動）〉が身体や〈魂〉での各〈被刺激性（受容性）〉（すなわち彼女や筆者にあってはそれぞれ〈受容〉や「閾値」）において、かの〈力〉をして〈量（運動）〉なる〈感受性〉のままに、身体ばかりか、〈魂〉へと伝わらせることを〈量（運動）〉自ら証明させるのである、だからデイドロが〈なぜ感受性、生命、運動を物質の特性としてみないのか〉、さらに〈物質（感受性）の運動法則はいまだ粗描すらされていない〉と述べたことに、彼女にいう〈感受性〉を当てはめようと、筆者は彼女にいう〈感受性〉が〈粗描〉でなくさせられねばならぬことを、かつ少なからず〈受容（閾値）〉においては「度合い」とならず、かかる〈特性〉たる〈運動（量）〉であってしかるべきことを今日認めおく必要があると主張せざるを得なくなるわけである。

次にデイドロの場合はどうか。つまり彼に〈感受性は感覚になる〉と語られた点から、〈感受性〉の〈被刺激性（受容性）〉で生じるとされた〈感覚〉は〈量〉や「度合い」によって成るかどうかである。この〈感受性（sensibilité）〉がヴェーユにいう〈量〉たる〈感受性（sensibilité）〉に等しいとみられるので

あれば、〈被刺激性(受容性)〉による〈感覚〉の現出やそのいわば中身をして〈量〉にさせられるほかないがゆえに、彼にいう〈感受性〉の〈被刺激性(受容性)〉は〈感覚〉を〈変化(度合い)〉として打ち出すことができなくなるにちがいない。だからこのいずれかを確かめたく、筆者が彼の『生理学要綱』に〈量(quantitatif)〉の語を探したにもかかわらず、みつけれずにいたのは筆者の怠慢にあるにせよ、その語が無いとみては、そこに何が示唆されると受け取り得るか。彼が〈量〉を意味させない〈運動〉の語を持ち出したのは、〈運動〉がたんに〈生命〉の「動き」を証すためにあったのであろうか。あるいは彼にいう〈特性〉の一である、〈感受性〉の〈被刺激性(受容性)〉は〈敏感な、活発な〉「動き」で、かかる〈変化(度合い)〉をみせることをあらわすためにあったのであろうか。それにしても、〈感受性〉なる〈被刺激性(受容性)(の力)〉がかかる〈変化(度合い)〉とみなされくるならば、彼女にいう〈感受性〉の〈受容〉としての〈量〉に矛盾しようといえるは確かである。要するに彼が〈感受性〉(の運動)を〈量〉と判じない以上、筆者が記しおいた「感受性すなわち感覚」は〈感受性〉すら〈感覚〉でしかないことを、〈感覚〉を生じさせる、〈感受性〉の〈被刺激性(受容性)〉は〈敏感な、活発な〉とされる〈変化(度合い)〉とみる以外にないことをさすのだ。別言すると〈感受性は感覚になる〉のだから、この〈被刺激性(受容性)〉は〈感覚〉に〈感受性〉なる「度合い」を保有させるにすぎないし、彼をしてこうした〈感覚〉を〈感受性〉に割り当てては〈感受性〉を〈感覚〉にいい換えさせるだけになるわけである(このことがヴェーユに否定されるはカントの場合も含め、後段にて明らかにする)。

そしてカントの場合はどうか。つまり彼に〈感覚自体はいかなる客観的表象でも全然ない〉し、〈感覚〉の〈現象はことごとく量である〉⁽⁶⁾とされ、この〈感覚〉から〈表象をうる性能(受容性)は、感性と呼ばれる〉⁽⁷⁾と語られた際、いわば「感覚は感性になる」といえる点から、〈感覚〉の〈受容性(rezeptivität)〉(デイドロが〈感受性(sensibilité)〉を〈被刺激性(受容性)〉としてみるのと同じに捉えられる)で生じる〈感性〉は〈量〉や「度合い」によって成るかどうかである。これはカントに身体でのではなく、意識での、〈量〉たる〈感覚〉の〈受容性〉をして〈感性〉を意識に〈表象〉せしめると語らせる謂だから、

〈感性〉(の中身)も〈量〉でなければならなくなる、換言すると〈感覚〉の〈現象〉とその〈感性〉である〈表象〉は〈量〉に変わりがない、要は〈量〉たる〈感覚〉の〈現象〉を〈量〉たる〈感性〉の〈表象〉にさせることは、〈感性〉が〈感覚〉でしかない意味であるために、「感覚は感性になる」とされる際の〈受容性〉すなわち〈感性〉は〈感覚〉による〈量〉を担う以外にないということである。しかるに一方で、カントにいう〈受容性〉さえ、ディドロにいう〈被刺激性(受容性)〉と同じく、一般的語義である「度合い」とみなされては、〈感覚〉(の現象)が、さらにその〈受容性〉が〈量〉であるといわせたことに矛盾してこよう。たとえば「赤」と捉え得る〈感覚〉は「赤」という質をあらわすが、しかし「質」はその〈量〉よりか、ディドロに〈敏感な、活発な〉と記されるほどに、〈魂が意識する(感じる)〉、この〈変化(度合い)〉を示すと指摘できる方が不断の理解になる。しかり、〈感覚〉には〈量〉の概念が適当しないのだ。すると〈感覚(質)〉が意識での〈受容性〉において、〈感性〉になるにしても、〈感性〉は〈量〉でなくなるのだから、ヴェーユにいう〈感受性(量)〉はカントの〈感性〉とばかりか、ディドロの〈感受性〉とも異なると受け取らざるを得ない。それに、筆者が〈質〉たる〈感覚〉の〈受容性〉でもたらされるとする〈感性〉はそこで突如〈量〉たる〈感性〉に変わることがないと、またかかる〈感性〉は〈感覚〉よりも〈感情〉にふさわしくみられはしないかと読んでみても、これらのことに〈感性〉を生じさせるうえで欠かせないと察知される能力(の語)がカントに見出せないのだ。たとえばディドロが〈感受性は感覚になる〉と語った際に、〈感受性〉に〈魂〉で働きかける〈能動〉能力〈感じる(sentir)〉がヴェーユと同様に散見されたのに比べると、筆者は不勉強のせいか、意識のそうした能力(の語)をおよそ〈受動〉能力となろう〈感性〉(の成立)に対してみつけることができなかったし、この能力(の語)なくば、同時に〈感覚〉がなぜ〈感覚〉の表記ではない語〈感性〉といわれるのか見定め得なくなるのだから、つまり〈感覚〉〈感性〉や〈感情〉のいずれにさせるか明確にし得ないのだから、カントに〈感覚〉の〈受容性〉では〈感覚〉が〈感性〉になるといわせても、筆者は〈感性〉が〈感覚〉以外でないと、この〈感性〉すなわち〈感覚〉が〈質(の度合い)〉か〈量〉かを上記したごとく

探らずとも済んだといえるわけだが、それでもカントにいう〈感性〉がヴェーユをして〈感受性〉を〈量〉と語らせる、その〈量〉に同じかを確認めるために比較検討する必要が課せられていたのであり、ここによりやく、〈感性〉が〈量〉にみられたにしろ、その〈量〉は彼女が〈感受性〉で強調しよう〈量〉とは、この意味するところとは異なると捉えおかねばならない結語を得ることができる。とはいえこの〈感受性〉に〈質（の度合い）〉が適當するとみるのも不可能になる（彼女にいう〈感受性〉についてはこれまで語られた通りである）。

ところで、筆者は先きに、デイドロにあって「〈感受性〉なる〈被刺激性（受容性）（の力）〉がかかる（〈生命〉の「動き（運動）」の）〈変化（度合い）〉とみなされくるならば、彼女にいう〈感受性〉の〈受容〉としての〈量〉に矛盾しよう」と記したが、およそ「矛盾」はこの二人だけの比較にとどまらないところにも見出され得るのだ。筆者がたとえば、デイドロの「認識論」の一を問う場合、彼は〈魂〉の〈被刺激性（受容性）〉において、そこに〈能動〉能力〈感じる（sentir）〉が〈感受性〉に働きかけ、〈感受性（sensibilité）は感覚になる〉ように、〈受動〉能力〈感覚〉を生み出した（この点で彼はデカルトに学び、身体の〈感覚〉を〈sens〉としたが、しかし〈魂〉の〈感覚〉を〈sentiment〉でなく、〈sensation〉にいい換えていたとみえる）と、またカントの「認識論」の一を問う場合、彼は意識の〈受容性〉において、そこに〈能動〉能力が〈感覚〉に何ら作用せずに、「感覚（Empfindung）は感性になる」ように、〈感性（Sinnlichkeit）〉を生じさせたと繰返し指摘しておくなかで、両者は〈感受性〉や〈感性〉が疾うに「〈感覚〉でしかない」と表記していた通り、〈感覚〉に変わりなくなることをねらいにしたと察知されるのに、この〈感覚〉ばかりでなしに、両者をしてなおも〈感受性〉や〈感性〉まで使用させるに至ったことに、要は「矛盾」は両者での、〈受容性〉以前の〈感受性〉や〈感覚〉の個々の能力に、〈受容性〉以降の〈感覚〉や〈感性〉という、別の能力をそれぞれ加えるのみか、一体にした感のある能力に仕立て上げたことにあるとみられる。

そのうえデイドロやカントにいう各〈受容性〉にあって、前者が〈感受性〉を〈感覚〉に、後者が〈感覚〉を〈感性〉にみることによって、各〈受容性〉で、何ゆえ前者では〈感覚〉に、後者では〈感性〉になるのかもさることなが

ら、前者の〈感受性〉が例の「度合い」に、後者の〈感覚〉が例の〈量〉から「度合い」に捉えられるとされる際、わけでもカントに語られる〈量〉や「度合い」について、筆者は後記するヴェーユの見方に比べると、〈感覚〉の〈量〉がなぜ〈外延量〉と〈内包量〉に区別させられねばならぬのか、「矛盾」とまではいわずとも、疑問に思えるからである（だがあるとき發揮された、同じ〈量〉にみえる〈感覚〉が〈受容性〉で〈外延量〉ではなく、〈内包量〉に、かつ〈感性になる〉は「矛盾」としかいいようがなくなるも確かである。のちに触れる「神経伝達物質」は意識（おそらく脳）でそれほど都合よく、便利に〈運動〉するのであろうか。そう区別させるはカントに展開されよう「観念論」がゆえかである）。そこで〈量〉や「度合い」のことを知るべく、筆者はすでにディドロが「〈感受性〉を〈量〉と判じない」と記しおいたのだから、ここではカントが用いた、上記の用語とその前提となろう、「〈感覚〉の〈現象はことごとく量である〉」と語った、前記の引用文を参照することにし、そこからヴェーユにいう〈感受性〉は、カントに倣っていえば、いかにみられるかが問われねばならなくなる。

〈感覚の現象〉である〈量〉が周知の、空間的広がりと時間的持続をさす〈外延量〉とされると同時に、〈量〉は意識での〈受容性〉に出会うときから、なぜか〈外延量〉以外の、疾うに述べた〈質〉をあらわす〈内包量〉をも含ませて語られなければならないとされる。そこで〈感覚〉の〈現象〉それ自体が〈外延量〉と、〈感覚〉それ自体が〈質〉を示す〈内包量〉となり、〈内包量〉がこれも一見しておいたように、筆者にいう、〈質〉の「度合い」であると受け取ることができる。だからカントのいう、意識の〈感覚〉それ自体にみられる〈受容性（Rezeptivität）〉が〈感性（Sinnlichkeit）〉にするは、〈感性〉が〈感覚〉の〈質〉の〈内包量（度合い）〉にさせられるしかなくなるのだ（ちなみにディドロでは、〈魂〉の〈感受性〉にみられる、〈特性〉の一たる〈受容性（sensibilité）〉が〈感覚（sensation）〉にするは、〈感覚〉が〈質〉の「度合い」にさせられることになる）。これはまた、〈感覚〉が〈表象をうる性能（受容性）〉によって、今度は〈表象〉となった〈感覚〉が〈感覚〉とされずに、〈感性になる〉といわせる、この〈表象（感性）〉は上記の通り、〈質〉の〈内包量（度合い）〉をあら

わすれとみえたからして、〈感覚の現象（外延量）〉を〈感覚〉より取り除いた〈内包量〉でしかないと、要は〈感性〉が〈表象〉であるために、〈外延量〉たる〈感覚の現象〉ではなくなる、〈感覚〉の〈質〉の〈内包量（度合い）〉にならざるを得ないと指摘されるようにいい換えられる。したがってカントが〈内包量〉とみたのがなぜかは、〈現象〉に代えて〈表象〉の語を用いたゆえであり、〈表象〉をして〈感覚〉を〈感性〉の語にいい直させ得たと推察されるが、しかしたとえば意識中の「神経伝達物質」がそれ自身で〈内包量〉〈表象〉ましてや〈感性〉になったと判断し得るのか、それとも〈神経〉か、意識自体が可能にするのか。「神経伝達物質」や〈神経〉なる各〈物質〉がかかる判断を生み出すは〈物質〉だから不可能である。すると〈内包量〉〈表象〉や〈感性〉の各語を打ち出すはカントの意識中の、他の能力〈思惟〉に委ねられねばならなくなる（〈外延量〉〈現象〉や〈感覚〉が上記の各語に比べ、どうみられるかについては後段で扱う）。筆者が先きにカントを「観念論者」と記したはこれによるし、また「唯物論者」ディドロといえども、〈思惟（理性）〉に頼らずにおれないはカントと同様である。なぜならディドロも〈被刺激性（受容性）〉において、〈感受性は感覚になる〉と断じては〈感覚〉という語を持ち出していたからである。ディドロとカントはこのように、〈感受性〉と〈感性〉の語をそれぞれ提起するにせよ、これらが〈感覚〉と無関係でないとみる点で、さらに〈感覚〉の〈質〉の「度合い」をあらわすという点で一致させたがゆえに、筆者は〈感受性〉と〈感性〉が「〈感覚〉と変わらない（〈感覚〉でしかない）」と答えおく以外になかったのである。それは〈sensibilité〉に綴られる〈sens（感覚）〉で、また〈Sinnlichkeit〉の〈Sinn（感覚）〉でも明らかになろうし、ディドロがこの〈感覚（感受性）〉をカントの例でいう〈外延量〉たる〈量〉に捉えていなかったことに、カントも〈感覚（感性）〉を〈感覚の現象（外延量）〉とみはしなかったことに起因するやも知れぬと読み得るからである。要するに両者にあっては、いわば〈量〉の〈量〉にすら展開しよう〈感覚の現象（外延量）〉のことが深く語られ探られなかったのだ。

以上に語られたディドロやカントに対し、筆者がヴェーユにいう〈感覚〉と〈感受性〉をもっぱらカントに使用された表現にまねて比べんとすれば、それぞ

れはいかなる能力と指摘され得るであろうかと問う必要がある。その結語（答え）を先きに述べると、彼女にみる〈感覚〉と〈感受性〉はいわずと知れたこと、カントのように、〈感覚〉が「感性になる」、またデイドロのように、〈感受性は感覚になる〉のではなく、個別に配置される能力なのだ。つまり彼女のいう〈感受性〉には〈感覚〉的要素がないと察知される。次に記す結語（答え）は、筆者が彼女にいう、〈感覚〉をカントの〈感性〉でいう〈内包量〉要は〈質〉の「度合い」と、〈感受性〉をカントの〈感覚〉でいう〈外延量〉要は筆者の主張してきた〈量〉とみなしなければならぬことにある（彼女にすると、〈感覚〉はカントやデイドロの各捉え方に従わずとも、〈感覚〉成立当初より、〈質〉の「度合い（内包量）」をあらわすといわせるだけである）。ただし〈量〉を〈外延量〉とみる場合には以下に注意する必要がある。〈外延量〉とはカントがいうに、〈感覚の現象〉をさしていた。ところが彼女にとって、〈現象〉すなわち〈この世界（外部）〉の「事物または物事（対象）」の現われを捉えるは身体（五官や内臓）による〈感覚〉と〈感受性〉であつたし、それぞれが〈魂〉にさえ伝達される能力であつたにしても、〈現象〉はカントに語られる〈感覚の現象〉をさすのでなしに、〈感受性〉の〈現象〉でなければならなくなった。なぜなら彼女が〈感覚〉と〈感受性〉を別々の能力とみなしたために、カントにいわせる、〈量〉の一たる〈内包量〉を〈感覚〉に担わせ得る、要は〈感覚の現象〉は彼女では上記の通り、端から〈質〉の「度合い（内包量）」としてあるとみえたのであり、それゆえ〈量〉の他の一たる〈外延量（現象）〉を〈感覚〉でなく、〈感受性〉に当てはめることが可能になるといい得たのである。

前段を別言して、今一度確認すると、確かめられるべきことは、ヴェーユをしてカントにいう〈外延量〉なる〈量〉にかかわらせることにあつて、この〈量〉を〈魂（une âme）〉で〈受容（acceptation）〉し得るは〈感覚〉も〈受容〉されるが、その〈質〉の「度合い（内包量）」ではもはやなく、〈感受性〉であつたということである。〈感受性〉が〈外延量（現象）〉を〈魂〉にばかりか、身体に〈受容〉させて生み出される能力になるとみるは以下による。カントの説く一において、〈外延量（感覚の現象）〉が〈受容性〉で「取り除かれる」ことは、この〈感覚（感性）〉に、また〈感覚の現象〉でなしに〈表象（感性）〉に

筆者の指摘した「空間的広がりと時間的持続」がないことを意味させた。カントのいう、意識での〈受容性〉では〈感性（感覚）〉が〈質〉の〈内包量〉を示すがゆえに、一方でいう〈外延量（感覚の現象）〉たる「空間的広がりと時間的持続」でなくなるのであり、このことは彼女に〈感覚は質料、空間、時間も含まず〉⁽⁸⁾と語られたことに同様である。もちろん彼女にあっては、〈感覚〉は何も彼にいう、かの〈現象〉としての〈外延量〉をさすときだけにかぎらず、たえずその〈量〉であり続けるにしろ、〈質料、空間、時間〉を持ち合わせることはないのだが。そうなると筆者は彼にいう〈感覚の現象（外延量）〉と違って、彼女にいう、〈魂（une âme）〉のみか、〈身体〉にも〈受容〉されて生じくる、〈（外延）量（要は〈現象〉）〉としての〈感受性〉にこそ、〈質料、空間、時間〉が含まれているといわなくてはならなくなる。この〈感受性〉が〈質料〉とみえるは、〈質料〉を〈質〉にではなく、〈物質〉に捉えることにある。〈質料〉はたとえば、筆者が前記していた、身体や〈魂〉を駆けめくり伝わる「神経伝達物質」であり、〈空間、時間〉は「空間的広がりと時間的持続」すなわちカントにいう〈外延量〉を示す以外にない。要するに彼女に主張される〈感受性〉はその「神経伝達物質」で伝えられる、「空間的広がりと時間的持続」をさすところの〈（外延）量〉であるということだ。彼女が〈激しさと時間〉と記したのは、まさにかかる〈量〉のことをいわせんとしたことなのだ。〈激しさ〉は「空間的広がり」を、〈時間〉は「時間的持続」を示唆させる。〈激しさと時間〉によって、この〈量〉を身体から〈受容〉した〈魂（une âme）〉が〈une âme〉のみにとどまらず、〈（自然的な）魂（l'âme）〉全体に亘って、〈l'âme〉を〈空無（真空）〉にするとみたはすでに触れた通りである。したがってこの〈（外延）量〉は〈激しさ（空間的広がり）と時間（的持続）〉をそれ自身に伴わせ増さずにおかないことを予想させる以上、〈感受性〉は〈（外延）量〉という、さらにその〈量〉の〈量〉という表現を可能にする（彼女にいう、身体や〈魂（une âme）〉それぞれの、あるいは身体から〈魂〉に伝達される〈感覚〉の方は各部位での〈質〉の〈（内包）量（度合い）〉になるといえばよい）。だから彼女に語られる〈受容〉にとっては、〈（外延）量〉やその〈量〉の〈量〉をあらわす〈感受性〉が、〈質〉の〈（内包）量〉を示す〈感覚〉が充当させられてくるのだが、こと〈（外

延)量(現象))に関しては、もはや〈感覚〉にでなしに、〈感受性〉に対して用いられなければならぬことが明かされたわけである。

こうして、ディドロやカントが取り上げた〈感受性〉や〈感性〉は結局のところ、いずれも〈質〉の〈量(度合い)〉を示す〈感覚〉になるほかなかったのに比べ、ヴェーユにいう〈感覚〉と〈感受性〉においては、このうち〈感覚〉は彼らと同じく〈質〉の〈量(度合い)〉をさすにあるにせよ、〈感受性〉の方はその〈感覚〉とは別の能力にみられては、それだけでも彼女独自といえよう能力に位置づけられてくる。だからかかる見方に立てば、筆者はディドロが〈感受性〉に〈感覚〉を、カントが〈感覚〉に〈感性〉をみた、筆者に一見「矛盾」すると捉えさせた見方を回避し得るだけでなく、〈感覚〉と〈感受性〉を改めて組み入れる、彼女にいう「認識論」をかたちづくらせ得るにちがいない。筆者に「矛盾」と語らせるは、彼女が〈感受性〉によって、〈わたしはわたしの身体構造に妨害される〉⁽⁹⁾と記すとき、この文章を踏まえてみる必要があるからである。これに対し、〈感覚〉では、彼女(わたし)は〈妨害〉を受けることはなく、〈感覚〉は見たり、聞いたりするままに〈受容〉され、〈それ自体以外わたしたちに何もたら〉さない能力とされる。確かにディドロは〈動物的構造にあって〉、〈神経だけがそれ自身で感受性を有している〉〈感受性は動物に固有の性質である〉とし、〈感受性が動物的物質の運動以外の…何ものでもない〉、この〈運動〉は〈組織された、物質の(持続的)運動法則〉に従われているというからして、〈感覚〉もまたこれと同様な〈動物的構造〉に則って生じるよう〈運動〉するしかない能力となる。したがって〈感覚〉を伝える〈動物的〉要は〈身体(的)構造(組織)〉は〈妨害〉を惹起させるとはディドロに言及されていないと読むほかなくなる。そのうえ筆者にすれば、かかる〈構造(組織)〉での〈運動〉自体は〈被刺激性(受容性)〉によって「感受性すなわち感覚」の伝達になるといえたのだから、そこには彼女にいう〈妨害〉があってはならなくなる。なぜなら、〈感覚〉と〈感受性〉を個別に扱い、前者に〈質〉を、後者に〈量〉を担わせたと察知される、彼女の立場では、〈身体構造〉に〈妨害され〉ない前者と〈妨害される〉後者の各能力を「感受性すなわち感覚」とさせるごとき、一つの能力とみとどけることはそれ自身すでに「矛盾」であって、不可

能になるからである。このことは同時に、カントの場合にも当てはまることだといわねばなるまい。

以上に述べたことで、ディドロの〈感受性〉やカントの〈感性〉のだけではなく、ヴェーユのいう〈感受性〉の、あたかもディドロが彼の生きた時代や後世に〈感受性〉の〈証明〉を託せんとした（願った）感のある、〈いまだ粗描すらされていない〉という表現の〈粗描〉と、彼らと彼女の、上記したとき異同（相違）が筆者にとって（筆者なりに）みえてきたということができる。たとえば「認識論」なるものがディドロでは「唯物論」、カントでは「観念論」と指摘されるように、ヴェーユにいう「認識論」は彼らの各それに比較させては、何に支えられているのかがだ（これについて検討するは後段に譲る）。とまれ彼らとの異同がみられることを受けた、その比較において、筆者がさらに主張しておくべきは、彼女にいう〈感受性〉を〈感覚〉と同様に、「認識論」に組み入れさすことを、だがないまでも〈質〉の「度合い」でなしに、〈量〉としてあることを確立し周知させることにある（〈感受性〉が「認識論」の一能力に認められることでは、そこにあわせて「存在論」と「実践（価値）論」が含まれるとみた筆者にとって、「認識論」は彼女に哲学を成り立たせずにいないといわせ得る）。カントにいう〈外延量〉が現実の〈現象〉であって、これをしかし〈悟性（知性）〉で説くように語るのではないかぎり、さらに〈感覚の現象〉といわせないかぎり、〈現象〉の〈受容〉から生じるは彼女にいう〈感受性〉であるということにならねばならぬのだ。そうみることによって、彼女にかたちづくられるであろう「認識論」での〈感受性〉と〈感覚〉は、これらの能力をして一つの能力たらしめたディドロやカントの捉え方にでなしに、個別にあることが明らかになるわけである（〈感覚〉が「認識論」中の一能力だとて、彼女には〈感覚（質）それ自体以外〉〈いわば何ものでもない〉能力として配置されていたにすぎないことが想起される必要がある）。彼女が用いる〈感受性（sensibilité）〉たる語はなるほど語のうえで、ディドロのそれと同語であっても、その用法を違わせるとみたが、それでも筆者の知るかぎり、彼にいう〈感受性〉の語は彼女のその先例になるはずである。だからディドロに強調された〈感受性〉は当の時代の斯界の思想家（哲学者）たちに注目されたであろうし、これがカントに

影響を与えたか定かにならずとも、万ーカントがそれまでにないディドロ独自の〈感受性〉のことを知って、ディドロにいう「感受性すなわち感覚」を「感覚すなわち感性」とし、多少〈受容性〉で生み出される能力の語が異なるとて、この能力はそれでいて、およそディドロのいう〈感覚〉の語と無関係でなくなる、これもカント独自の能力〈感性（Sinnlichkeit）〉を打ち出していたといえるならば、彼らの〈感受性〉や〈感性〉とヴェーユのいう〈感受性〉の用法は確かに相違してみえるにもかかわらず、彼らの使用する、その各語と各用法はすでに流布されているだけに、ここに記してきた、彼女の語〈感受性〉とその用法さえ彼らと同じように、今日公認されてしかるべきであろうと断じておかなければならない。繰返しいうが、彼女がディドロやカントとは別の〈感受性〉を打ち立てたことによってはじめて、彼女独自の〈感受性〉を流伝させ得るとともに、独自の「認識論（哲学）」を築くことを可能にしたのである。〈感受性〉や〈感性〉はディドロやカントにすら、ときに心理学の、ときに哲学の要語として認められているのだから、彼女にいう〈感受性〉もそうあるべきなのだ。もとより筆者には、この〈感受性〉にこそ真のその語意が見出せるといえるからだ。

だが上記していたことにより、ヴェーユにいう「認識論」もディドロのそれに似て「唯物論」にみられたり、また彼女を「唯物論」者に仕立て上げたりはしないのか。すでに触れたごとく、否である。なぜか。それはたとえば、両者にあって語られる語〈corps humain（人体）〉の使い方が各相違すると筆者にいわせるからである。ディドロの場合、かの『生理学要綱』で調べるかぎり、〈人体〉は「唯物論」の主張がためか、たえず単数表記になっている⁽¹⁰⁾。ヴェーユの場合は複数表記である⁽¹¹⁾。ディドロによる単数表現（le corps humain）は〈人体〉と訳すだけで、疾うに一見した、〈この世界（外部）〉を〈物質〉に見立てて成る、マルクスの「唯物論」とは異なり、それこそ〈魂〉までを、そのうえ例の「感受性すなわち感覚」をさえ〈物質〉にみなす、いわば〈人体（身体）〉内部のことをもって成る「唯物論」を示しくる。これに対し、ヴェーユはどうか。筆者が参照できた既出引用文には確かに、単数表現も見受けられる⁽¹²⁾。だが読んで知る通り、〈le corps humain〉は〈精神にとって〉という条件付きで用

いられる。すると単数と複数の表現にみられることは何か、少なくとも両者は関係するか否かが質される。関係する。いかなる関係かは、単数表現が複数表現に組み入れられている関係にある。要は〈人体〉の複数表現はデイドロという身体（物質）と、彼女に〈精神〉（部位）を含ませ語らせる〈（自然的な）魂〉とを保有させるのである。だから彼女は上記を極論していえる、デイドロ（やマルクス）のような「唯物論」者でも、カント（や〈真理の探求〉において〈精神〉の〈理性（思惟）〉を行使するデカルト）のような「観念論」者でもなくなるわけだ。つまり筆者は彼女にいわせよう「認識論」を「唯物論」や「観念論」のいずれによっても捉えることができない表現がある、換言すると彼女の「認識論」をして「唯物論」にとどまらせないは、他方に「観念論」（またはこの逆という表現）があるとみるからである。

以上はだから、ヴェーユの「認識論」なるものが「唯物論」とのみか、同時に「観念論」とも無関係でないことを示唆させていようが、しからばそこにどんな関係がみられるといえるのか。世間一般にいう「観念論」が〈理性（知性）〉を原動力にして、〈この世界〉はむろん、「あの世界」のことすら語り得るにしる、彼女にいわせよう「観念論」的「認識論」は「あの世界」のことを〈理性（知性）〉に依存させてはならなかったし、ましてやこれも彼女にいう「唯物論」的「認識論」に掛けずに成立することのない関係にあったのだ。かかる関係をデイドロとカントを取り上げ言及した語で以下に繰返すと、「唯物論」や「観念論」のことをそれぞれ身体や〈（自然的な）魂〉に代表させては、身体や〈魂〉が複数表記〈人体〉の語をかたちづくるとみるほか、こうした語でいえる、上記の「唯物論」と「観念論」の関係は、身体から〈魂〉へ伝えられる能力の「求心的」関係になるといい得る。この能力とは彼女にあって、いわずと知れたこと、身体に生じる〈感受性〉であった。

ヴェーユに主張される〈感受性〉は〈この世界（外部）〉の対象（マルクスのいうごとき〈物質〉だけではない対象）を受け入れてもたらされる能力であり、デイドロのように、身体内部での〈（神経伝達）物質〉の〈運動〉によって、身体より〈（自然的な）魂〉へ伝達される、その〈感受性〉は彼女の場合も、当然〈魂（脳）〉にかかるとみないわけにはゆかなくなる（ただし〈感受

性〉は彼女にあって、〈魂〉で〈感覚(sensation)と呼ばれる〉ことはないし、この〈感受性〉それ自身をして彼女の〈魂〉を〈空無(真空)〉にせしめ、「あの世界(超自然的な領域)」に参入させたがゆえに(「唯物論」者デイドロには「あの世界」への参入のことなどは論外であった)、〈感受性〉の〈魂〉への影響が彼女にいう「観念論」と指摘できるかは別であるといえども、少なからず、〈悟性(理性)〉を活用させて成るであろう、カントにいう「観念論」と同様であるとはいわれなくなる。したがって、彼女に記されてくる、複数表記〈人体〉には〈自然的な領域〉での、いわゆる「人間のからだ」なる身体や〈魂(脳)〉がだけでなく、「あの世界(超自然的な領域)」に対応させられては、もはや〈脳(身体)〉であり得なくなる〈超自然的な魂〉が含まれることによって、要は彼女の〈人体〉は〈自然的な魂〉における〈感受性〉の、さらに〈感受性〉に発する諸〈感情〉の〈運動〉次第で、〈超自然的な魂〉を現出させる、「人間のからだ」になり得ることによって、これらを加味させずにおれない、彼女の「認識論」が築かれているとみておかねばならないのである。

そのうえヴェーユの「認識論」は〈生き(てい)る〉、「人間のからだ」をさす〈人体〉にかかわっており、かつときに〈人体〉の「生得的」な〈運動〉ばかりでない、〈激しさと時間〉たる、〈量〉の〈量〉という、〈感受性〉の〈運動〉を有する〈人体〉をあらわすのでなければならなかった。だから〈感受性〉の〈運動〉は彼女にあってさえ、デイドロにいう、〈生き(てい)る生命〉を証すのと同様であれど、しかし〈魂(脳)〉を含めた身体なる〈物質〉にとどまろう、デイドロの〈感受性〉の〈運動〉でなしに、再度いうが、「人間のからだ(人体)」をば身体や〈自然的な魂〉にのみか、〈超自然的な魂〉(の現出)にもかかわらせるのが、彼女にいう〈感受性〉であり、その〈運動〉であったのだ。こうして、彼女をはじめとする〈わたしたち〉人間は自らの身体と〈自然的な魂〉の、つまり〈心身〉の各〈運動〉や〈心身〉同志の繋がる〈運動〉で、〈心身(人体)〉を〈逆創造〉させて「あの世界(超自然的な領域)」に居ます〈神〉に返すことが可能になる。ここにおいて、彼女の「認識論」はこの身体と〈自然的な魂〉を、すなわちデイドロのように身体(物質)とのみ捉えてはならない〈人体〉を取り入れて成り立っていなければならなくなる。たとえ「認識論」

なるものは不断〈魂（あるいは精神や意識）〉にかかわる諸能力の「知る作用」を述べ語ることにあるといわれるにしてもだ。すると彼女の「認識論」にはなるほど「唯物論」的「観念論」的に理解されよう因子が窺えるとはいえ、それはもはや、世間でかかる「知る作用」にみる「唯物論」と「観念論」とを一堂に集める（いっしょにする）ことも、個別に取り上げて済ますことも不可能であると示唆させるからして、「唯物論」や「観念論」といわせない、要は両表現を代表させる、身体や〈自然的な魂〉の各語にいい換えて、このおのおのを一続きにあらわし得る、別の表現を必要とする。別の表現とはこれまで述べたことを踏まえていうと、彼女の「認識論」なるものが〈運動〉論になると筆者に仮説されることにある。

〈運動〉論は上記のことを繰返すまでもないが、ヴェーユにいう〈感受性〉を身体や〈自然的な魂（l'âme）〉である〈人体〉に、もとより身体から〈自然的な魂（une âme）〉に、さらには〈自然的な魂（l'âme）〉から〈超自然的な魂（l'âme）〉にゆき渡らせることであり、この〈運動〉を「認識論」として述べ語る論でなければならなかった。彼女を筆頭に、多くの人にとって、〈感覚〉が身体（器官）でもたらされるのと同様に、〈感受性〉が同じ身体（器官）とみてよいそれに生じるし、しかも同時ではない各〈運動〉により、各同じ〈自然的な魂（une âme）〉に伝えられるのだから、それぞれが〈une âme〉でいかなる機序（しくみ）もしくは〈構造〉のもとに、いかに〈受容〉されるかを質すは「知る作用」を求めることになる、要は身体の諸能力も「認識論」に与するといわねばならぬわけである。とすれば彼女の「認識論」は〈感覚〉だけでなく、〈感受性〉もなしに述べ語られないということになろう。

〈感受性〉の〈運動〉はまた、身体の隅々に伝えさせる、実際に〈行動〉する（動く）ところの〈運動〉だからして、それ自身〈生き（てい）る〉ことをあらわさずにいない。したがってヴェーユにみられよう、この〈運動〉を跡付ける「知る作用」は〈生き（てい）る〉ことを現実にする「認識論」となる。彼女の場合、〈生き（てい）る〉とはこうした〈運動〉と切り離されては意味がない。「生得的」な、〈感受性〉をはじめとした、彼女の「認識論」をかたちづくる、諸能力の〈運動〉も、確かに〈生き（てい）る〉ことの証しになろうが、しか

し〈生き（てい）る〉ことをまさに明らかにするのはこの諸能力のなかで、「生得的」にのみとどまらせない〈感受性〉なのであり、〈感受性〉こそ彼女の「認識論」の基本に位置づけられる能力でなければならないのだ。だから彼女にいう、例の、〈自然的な魂（l'âme）〉中の〈精神（un esprit）〉部位の能力〈理性（知性）〉が、この〈感受性〉より、あるいは〈感受性〉から生み出される諸〈感情（かの〈世界の美の感情、不幸、歓喜や願望など）〉より優先させられると断じてはもはやならないわけである。それに、〈理性（知性）〉も〈運動〉するとて、身体全体で為されるのではなく、たんに〈精神〉部位内での〈運動〉にすぎない、たとえばデカルトの言を借りていうと、かかる〈運動〉とは〈精神〉部位内での、〈思惟する（能動）〉とこの〈能動〉からもたらされる〈思惟（受動）〉は〈同一のことがら〉を示す〈運動〉にほかならない（〈意志〉や命令で手や足が各動くかも知れぬが、それでも〈意志〉や命令は〈理性（知性）〉の〈思惟する〉とその〈思惟〉と別の能力に区別される）し、身体の〈感受性〉が〈激し〉い〈運動〉を伴えば、疾うに触れたごとく、〈思惟〉は〈逃亡〉する以外になかったであろう。こうした〈理性（知性）〉の〈運動〉とはほぼ同様な役割を担うのがあの〈感覚〉でもある。「見る」という視覚の〈運動〉はその〈感覚器官〉で像を結び、〈自然的な魂（une âme）〉に伝わっても、彼女に〈運動は量である〉といわれようが、〈une âme〉に〈質〉の〈量〉としてとどまるだけにあるからである。とどのつまり彼女をして同じ〈運動は量である〉ことに対し、〈量〉の〈量〉といわせるほか、身体の隅々を駆けめぐる〈感受性〉に比べるならば、〈理性（知性）〉や〈感覚〉は各「遠心的」に作用するときさえあるとみられども、身体全体にかかわる能力になり得ないということである。彼女にとって、〈理性（知性）〉は〈この世界〉では〈感受性〉に次ぐ、〈手段として〉しか役立たない第二義的な能力であり（〈理性（知性）〉は「あの世界」ではまったく役立たなかった）、〈感覚〉は〈この世界〉や「あの世界」でも〈何ものでもない〉能力であったと繰り返しておく。そこで彼女の「認識論」なるものは、〈理性（知性）〉や〈感覚〉を主役にせぬからして、それぞれによって成る、「観念論」的「認識論」や「唯物論」的「認識論」とは当然いえなくなるが、しかし「観念論」や「唯物論」を各言及する際に問われくる〈自然的な魂〉や身体に関

与せざるを得ないとみえる〈感受性〉が、なかでも〈自然的な魂〉を〈空無（真空）〉にかたちづくり得るならば、そこに〈感受性以上〉にもなろう〈感受性〉が彼女に語られている以上、彼女は〈自然的な魂（脳）〉を含めた身体全体に亘る、「生得的」な能力であって、ときに〈激し〉い〈運動〉をみせる〈感受性〉を中核とした「認識論」を、つまり実際に身体全体を動かしてもたらされる能力〈感受性〉をして〈生き（てい）る〉「認識論」をすでに「観念論」や「唯物論」であり得ない、〈運動〉論にさせるべく打ち立てていたと断じおかねばならないのだ。

そのとき筆者に仮説される〈運動〉論は〈この世界〉といかにかかわるかである。これに答えるに、再度確認しておくべきは、〈この世界〉の〈諸事物と諸存在〉に接し惹起させられる諸現象に対し、ヴェーユは〈感覚〉だけでなく、自ら主張しよう、身体の〈能動〉能力〈感じる（ressentir）〉（この能力によって〈受動〉能力〈感覚（sensation）〉ももたらされる）とその〈受動〉能力〈感受性（sensibilité）〉でもって照応させ得ると語ろうが、しからば彼女にあって、〈この世界〉の〈諸事物と諸存在〉から生じる諸現象を可能にする能力が〈何ものでもない〉といわせる〈感覚〉よりも、〈感じる〉とその〈感受性〉であるほかないと断じられる一方で、かかる諸現象は何かと問えば、マルクスのみるごとき、〈この世界（人間外部）〉の、およそ〈感覚〉で求め得たであろう〈物質〉の現象でなしに、〈自然（この世界）の必然性〉たる〈世界の美〉と〈不幸〉の各現象であったということにある。彼女が指摘するまでもなく、〈感じる〉とその〈感受性〉が人間内部に発せられるは、当然〈感じる〉が〈質〉をあらわす〈感覚〉ではない、〈量〉である〈感受性〉を生み出すことによるが、しかしこれらの能力自身をして人間内部を「生得的」な〈必然性〉として〈運動〉させるにすぎなかったのだ。

だが〈感じる〉とその〈感受性〉は何に向けて〈運動〉し、なぜ〈量〉といわれるのかである。ヴェーユに強調される通り、人間はいかなる〈必然性〉にも従わねばならぬといえるからして、〈運動〉は〈この世界（人間外部）〉の〈必然性〉の現象である〈世界の美〉と〈不幸〉に触れるためにあり、〈運動は量である〉と語られるからして、〈運動〉は〈感じる〉とその〈感受性〉をば

〈変化（質）〉の〈量〉でなしに、〈量〉の〈量〉にみなさざるを得なくさせるわけである。〈運動（量）〉なしに、たとえば「赤」をその〈質〉の〈量〉として〈感覚〉し得るというのと同じく、〈感受性（量）〉の〈量〉にはなれないのだ。するとこの〈運動（量）〉すなわち〈感受性〉の〈量〉とはもはや身体の「生得的」な〈運動（量）〉だけにとどまらせはしないことをさすのであって、彼女にいう〈激しさと時間〉のさらなる負荷を示唆させずにいない〈量〉となろうし、筆者はそのうえ身体から〈自然的な魂〉へ伝わる、この〈量〉をもって、〈量（感受性）〉がカントのいう、〈感覚〉のではない、「空間的広がりと時間的持続」を示す〈外延量〉にいい換えられるやも知れぬとみた。要は人間内部での〈運動（量）〉すなわち〈感受性（量）〉の〈量（激しさと時間）〉は〈この世界（人間外部）〉の〈世界の美〉と〈不幸〉の各現象をいかに〈受け入れ〉られる（受容される）かに比例しているということである。このとき〈運動〉はさらなる〈行動〉あるいは〈労働〉を課するに等しいそれになっており、〈この世界〉を〈生きる〉に欠いてならない、人間内部の〈必然性〉をあらわさずにいないといわなければならぬのである。

〈世界の美〉や〈不幸〉の各現象を〈感じる〉人間には〈感じ〉られる〈感受性〉が生じくるし、そのことが〈この世界〉を人間自らに〈受け入れる〉ことを意味させる。だがたとえばマルクスのように、〈感じる〉とその〈感覚（Sinn）〉でもって〈物質〉が捉えられるにしろ、ヴェーユにとっては〈感覚〉は〈物質〉の〈質〉を問わせるだけであり、およそ〈物質〉自体を彼のいう〈感性的意識〉⁽¹³⁾に〈受け入れる〉ことは土台無理な話なのである。かりにマルクスがカントやフョイエルバッハの影響を受けて、〈感覚〉を精神（意識）とされるところで〈感性〉にみた〈感性的意識〉に〈物質〉を〈受け入れる〉というにしても、その〈感覚〉は彼女にすれば、〈理性（知性）〉でいかなる〈物質〉かと認めることとは異なるにちがいない。〈物質〉の例を石炭にして語ってみよう。〈感覚〉で〈物質〉の〈質〉を石炭と見分けたとて、これをいかに燃料にさせ得るかなどを見出すは彼にあってさえ、〈感覚〉や〈感性〉ではない、別の能力、上記でいう〈理性（知性）〉に委ねられねばならなくもなる。同様に彼が石炭で暖房を取り得ない、貧しい人たちにいかにすればこれを分け与えられるかを探り案じ

ることは、すでに「唯物論」の見方だけにとどまらず、〈理性（知性）〉に基づく「観念論」の見方なしに成り立たなくなることを示唆させる。だからマルクス主義に「認識論」が窺われるとみなされるならば、彼の「認識論」が彼女も指摘する通り、「唯物論」になるということは不可能であろう。

ヴェーユに記された語〈諸事物と諸存在〉のいずれかが〈物質〉に充当させられるとしても、その〈諸事物と諸存在〉（の諸現象）を〈受け入れる〉ことができる能力は〈感受性〉だけであるといえる。しかも〈感受性〉にあってそれすなわち〈運動（量）〉を跡絶えさしてはならないばかりか、そこから「認識論」には目もくれず、ただひたすら〈実存（存在）〉（論）をめがけた感のあるサルトルのように、たとえば〈不幸〉を拒むことすらできる〈理性（知性）〉を駆使して、彼自らが選択し試みる、〈この世界〉への〈投企（projet）〉や〈参加（engagement）〉にあるのでもないのだ。彼女が〈理性（知性）〉は〈手段として〉役立つ能力であると語る通り、筆者もこれを否定しはしない。なぜなら〈わたしたち〉が彼女を筆頭とした哲学者たちの、何らかの思想（哲学）を学ぶには、彼らが自らの〈理性（知性）〉を行使させ用いる、この思想（哲学）をかたちづくる一の語をみつけ出し辿らねばならないし、筆者は筆者でまた彼女の思想（哲学）から、〈ressentir〉とその〈sensibilité〉の語を知って、例の〈mouvement〉がこれらの能力で成るとし、こうした語を〈感じる〉〈感受性〉〈運動〉と命名するほか、これらを思想（哲学）に結びつけるはすべて、筆者なりの〈理性（知性）〉の働き（運動）による以外にないと察知されるからである。ただ〈理性（知性）〉は彼女の場合、〈この世界（人間外部）〉の現実（正体）を見抜いたうえで、働きかけられる能力としてあり、人間外部の〈必然性〉なる現象を人間側に都合よく拒否させ変えたりするように〈運動〉させられるのではなかったといい得る。彼女にとって、人間外部のかかる現象を真先きに担い切らせたはしかし、人間内部の〈感じる〉とその〈感受性〉である〈運動〉であったわけである。

〈感じる〉とその〈感受性〉はヴェーユの、現実の体験からもたらされたと知るにせよ、しかし〈理性（知性）〉で表現されよう、これらの語は現実での〈感じる〉とその〈感受性〉に同じであると受け取られるか、また彼女の〈理性

（思惟）で、彼女が意味させたい〈感じる〉とその〈感受性〉と、一般に語られる〈感じる〉や〈感受性〉とが同じにみられるか。筆者は後者の問いに対し、同じになるはずがない（だから筆者が彼女の追体験を試みるは不可能だと書いておいた）と答えるが、それでも筆者に捉えられる、彼女のいう〈感じる〉とその〈感受性〉が偽りであるというつもりは毛頭ない。これらの語を否定しようものなら、そもそも彼女の哲学は成り立たなくなろうから。一方に記された〈理性（思惟）〉は彼女のいうごとく、〈手段として〉役立つ役割を有するにすぎないためか、現実（現象）を〈思惟する〉か無視するかはともかくも、これを〈思惟〉に欠かせぬとする人にとっては何らかの語に置き換えられるだけで、現象（現象）を〈感じる〉ことができないからして、現実（現象）に立ち会えぬ、要は〈生き（てい）る〉生をあらわせぬからして、現実（現象）をそのまま〈受容〉できる能力ではないということになる。さらに彼女が自らの〈理性（思惟）〉で〈わたしはわたしの身体構造に妨害される〉と書き記したことに対し、彼女を除いた〈わたしたち〉は、〈妨害される〉が「生得的」な、人間内部の〈必然性〉たる〈運動〉もしくは〈激しさと時間〉を伴う〈運動〉でしかない〈身体構造〉によるとて、果たしてその〈妨害される〉現実（事実）に一一気づくことができているのか。この〈運動〉にて、〈わたしたち〉はときに、彼女にいう〈自然的な魂（脳）〉を含めた身体全体が疲労を〈感じる（覚える）〉ことに気づかされるだけであって、〈身体構造〉がどう変わったかを知り得ないにちがいない。

だから〈理性（思惟）〉なるものに筆者が結語してみるに、それはヴェーユにあって、たとえば、サルトルが〈わたしたち〉を〈この世界〉に〈実存〉させるべく行使し作為されるのではなく、〈世界の美〉や〈不幸〉の〈生の現実〉が自らの〈感じる〉とその〈感受性〉下の〈体験（運動）〉によって、この上記した〈世界の美〉〈不幸〉〈感じる〉〈感受性〉のままの各語に「見抜」か（判断さ）れるべく用いられるにすぎなかった、別言するとサルトルが〈この世界〉に〈嘔吐（nausée）〉を感じ、そこに〈無（néant）〉は〈存在される〉⁽¹⁴⁾と断じるからして、彼が〈存在〉し得るは自らにもかの行動（投企や参加）を課す意志（意欲）をもたねばならぬことにあるように、こうした〈理性（思惟）〉が行

動を実現させるところの、彼女にいう〈手段〉のためにしか働か（意識させられ）なかったと、また彼女からすると、〈不幸〉が彼の言う〈世界の無〉⁽¹⁵⁾に相当するか否かにここで焦点を当てずとも、〈この世界〉は〈必然性〉たる、この〈不幸〉ばかりか、〈世界的美〉でさえあるとされるにおいて、筆者が人間にとって〈不幸〉をマイナス（負）に、〈世界的美〉をプラス（正）にみるならば、世界は〈わたしたち〉人間の〈自然的な魂〉に対し「負」だけとしてあるのではなかろうと、しかも彼女は〈この世界〉の〈世界的美〉と〈不幸〉を〈感じる〉とその〈感受性〉なる〈運動〉でもって〈体験〉を現実にし、この各〈体験〉を経ては〈理性（思惟）〉で上記した一の語のごとくに表現する、要は〈理性（思惟）〉でのこうした語は人間外部に生じた現実（現象）を〈受容〉する、人間内部の〈感じる〉とその〈感受性〉をそのままに写し取らせて成るとみえるがゆえに、現実そのものを明かすことに変わらないということになる。そこから筆者は、彼のいう〈無〉に対して、これが「負」であろうとなかろうと、彼が世界を〈無〉のみとした以上、〈無〉は彼女にすると、〈世界的美〉なる、一方の現実を忘却するか無視した、彼の〈理性（思惟）〉によって、勝手に決めつけられた語になると、つまり〈理性（思惟）〉には世界（現実）を直視（注視）しようとする学習がないと、さらに彼の〈理性（思惟）〉は〈無〉でなくなるうえで、たえず〈実存〉せよと強いるような行動へと駆り立てるからして、このすべてがあたかもデカルトの〈真理の探求〉での《コギト（cogito）》と同様に、人間側の作為でもって成る、人間の傲慢さを謳い上げた思想（哲学）以外ではなくなると指摘し得る。彼女の方は繰返しいうが、世界（現実）を〈受け入れる〉ことができる、身体に生じる〈感じる〉とその〈感受性〉が〈自然的な魂〉だけか、ときに〈超自然的な魂〉へと伝えられる、各〈受容〉という〈受動〉こそ現実のことであって、そこで生み出された通りを〈理性（思惟）〉による語に託して書きあらわしていたにすぎないわけである。

〔続〕

註

- (1) 拙論「ヴェーユ身体論〔補Ⅳ〕」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第125輯, 2009年) 参照
- (2) 前号で取り上げた、ディドロ著『生理学要綱』の諸引用文以外の箇所(P.311)に、彼は古代からいい伝えられ、デカルトをしてこれを〈esprits animaux (動物精気)〉と語らせた同じ語を記す。筆者はこの語に対し、両者の使用する事情と異同を詳しく検討しないが、それでも〈動物精気〉がデカルトのいう通りであるとすれば、ディドロにあっても「血液」(物質)を示唆させるに間違いないと読み得る。そのことは当然であるにせよ、それよりか、両者のこの比較に当たって重要なのは(ディドロについては次の註(3)を参照のこと)、筆者にいう、デカルトの「日常的用法」において、デカルトはたとえば〈感覚(sensやsentiment)〉が「血管」を流れる〈動物精気(血液)〉のなかに、あるいは〈神経〉を伝わる「神経伝達物質」のなかに各含まれていると、つまり〈感覚〉は〈血液〉や〈神経〉の各なかに混入していると、さらにいえば、〈感覚〉が身体(の〈sens〉)から〈魂(l'âme)〉(の〈sentiment〉)へ流れ伝わるなかでの〈血液〉や〈神経〉を繋げる役割にあるということである。
- (3) デカルトが〈感覚〉は〈動物精気(血液)〉や「神経(伝達物質)」にかかわるというのに比べ、このかかわる〈物質〉を、デカルトでは一度も問われはしなかった〈感受性〉にみたディドロといえども、〈感受性〉が関係するは「神経(伝達物質)」だけにであった。〈感受性〉も本文で後述して解説する〈感覚〉もディドロにとって〈物質〉である。前号諸引用文中の〈物質〉の語に対し、彼が〈substance〉〈matière〉や〈corps〉の語を用いたとしても、各語はすべて〈物質〉と訳さねばならぬのである。〈物質〉という訳語が同一原語でなくとも、同じ意味でなければならぬのは、この訳語を使った、諸引用文中の主語にはつねに〈感受性〉の訳語が配されくるとする以外に、本文にも述べたように、彼は〈感受性(物質)〉を〈神経だけ〉に関与させるとみえるからして、〈感受性(物質)〉は〈動物精気(血液たる物質)〉ではなく、「神経伝達物質」にちがいないことを導き出せるからである。〈神経〉(のなか)を伝わるは〈感受性〉すなわち「神経伝達物質」のほかでなくなるというわけである。
- (4) Denis DIDEROT 《ÉLÉMENTS DE PHYSIOLOGIE avec les(Notes autographes)》(DIDEROT ŒUVRES COMPLÈTES, TOME XVII, HERMANN ÉDITEURS DES

SCIENCES ET DES ARTS) 〈il (l'organe) a donc sa portion de sensibilité qu'il garde.〉
P.499

- (5) 拙論「なぜ感受性なのか(4)」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第95輯, 1998年) P.48や同「感受性試論〔V〕」(新潟大学教養部研究紀要, 第21集, 1990年) P.24と同「感覚と感受性」(同研究紀要, 第22集, 1991年) P.P.54-56参照(これらの拙論には本文中の〈感性的感覚〉のほか, 〈感性的直観(Sinnliche Anschauung)〉や〈純粹直観(Reine Anschauung)〉の各語が記され, 各語は〈感性〉にかかわるとみだし, 本文次段落での〈被刺激性(受容性)〉を取り上げるに際し, ここでカントのその場合を問うておくと, 上記諸拙論に掲げた引用文なしに答えが見出されない。それは〈私たちが或る対象によって触発されるかぎり, その対象が表象能力へと働きかけた結果は, 感覚(Empfindung)である〉や〈私たちが対象によって触発される仕方によって, 表象をうる性能(受容性)は, 感性と呼ばれる〉にあって, これらの引用文により, 〈感性〉は〈表象能力〉すなわち〈表象をうる性能(受容性)〉にみられるならば, 〈感受性〉が〈被刺激性(受容性)〉としたディドロと〈受容性〉では同じであろうが, しかし〈感受性は感覚になる〉というディドロと相違して, 〈感性〉は〈感覚〉から生じた〈表象〉になることにあるからである。それゆえカントの〈表象〉の語に倣い, ディドロにいう〈感受性は感覚になる〉に当てはめれば, 〈表象〉こそ〈感覚〉でなければならなくなろうし, カントにあっては, 〈表象〉は〈感覚〉でなしに, 〈感性〉であり, 〈感性〉は意識での〈表象〉と, 〈感覚〉の〈対象〉への〈働きかけ〉による〈受容性(Rezeptivität)〉の役割をかねるということである。

序でながら, カントにいう〈感性〉あるいは〈悟性〉は周知のように, 折衷された語であると聞かされるが, そのことを筆者なりに以下に付記しておく。まず, 〈感性〉としたことは, デカルトにいう〈真理の探求〉の用法に基づいて語られよう, 大陸合理論での〈感覚〉否定とイギリス経験論での〈感覚〉肯定との折衷に起因するとみえる。そうだとすると, 〈物自体〉の〈物〉を受け入れ得る〈感性〉は〈感覚〉と等しい能力である必要があった。そして, このように, 〈感覚〉の〈感性〉としての受容は当然〈感覚〉肯定を示唆させると指摘し得る一方, この受容された〈感性〉を〈思惟する〉際は, 〈感性〉はもはや〈感覚〉否定の〈感覚〉を前提にするわけにいかないし, しかもデカルトが〈感覚〉否定を認めるべく注入させるは〈理性〉であってならないのだから,

- その能力にはデカルトの〈(純粹)理性〉やロックの『人間知性論』で説く〈知性〉ではない、別の能力すなわち〈悟性〉が〈理性〉や〈知性〉を折衷する能力として登場してきたのだとみる。カントに成る『純粹理性批判』は彼以前に用いられた〈理性〉(もしくは〈知性〉)に対する批判であったはずである。だからカントもこの〈悟性〉を原動力とした「観念論者」になろうといわせ得る。
- (6) 拙論「感覚と感受性」(新潟大学教養部研究紀要, 第22集, 1991年) P.55参照
- (7) 拙論「感受性試論(V)」(同上, 第21集, 1990年) P.24参照
- (8) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.4 註(9)参照
- (9) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) P.43註(2) 〈感受性〉によるはなぜかは同頁以降) 参照
- (10) Denis DIDEROT 《ÉLÉMENTS DE PHYSIOLOGIE avec les 《Notes autographes》》(DIDEROT ŒUVRES COMPLÈTES, TOME XVII, HERMANN ÉDITEURS DES SCIENCES ET DES ARTS) (第二部表題《ÉLÉMENTS ET PARTIES DU CORPS HUMAIN (人体の構成要素と部分)》中の〈le corps humain〉 P.337
- (11) 拙論「ヴェーユ身体論」(新潟大学人文学部人文科学研究, 第120輯, 2007年) P.45 註(3) (そこには定冠詞複数に等しい表示で3回〈les corps humains〉と記される) 参照
- (12) 拙論「シモース・ヴェーユの哲学〔Ⅱ〕」(新潟大学大学院「欧米の言語・社会・文化」研究, 第14号, 2008年) P.14註(3)参照
- (13) 拙論「ヴェーユとマルクス③」(新潟大学言語文化研究, 第12号, 2007年) P.9 註(7)参照
- (14) Jean-Paul SARTRE 《L'être et le néant》(Bibliothèque des IDÉES nrf Gallimard) P.116 〈Il (le néant) est été.〉
- (15) Ibid., P.53 〈néant du monde〉